

(6) 聴覚障害教育の必要性と教育の機関

私たちはどのようにして「ことば」が使えるようになったのでしょうか。幼児期の一般的な言語発達について考えてみましょう。1歳くらいになると、「マンマ」とか「ブブー」と意味のあることばを話し始め、3歳で平均500語、5～6歳で基本的な話しことばは、ほぼ完成するといわれています。これは、脳や神経の発達と密接に関わっています。脳は新生児期から急速に発達し、10～11歳で基本的なネットワークは完成します。したがって、早期からの適切な働きかけがないと正常な言語発達が困難になってきます。

では、聴覚障害児にことばの発達は望めないのでしょうか。聴覚障害児は見かけ上何一つ不自由なく、周囲の人ともそれなりに関わっているように見える場合が多くあります。だからといって、何の手立てもなくそのまま育てていったのでは、いろいろな問題が生じてきます。

しかし、障害に配慮し、言語発達や成長を促すための教育をすることにより全人的な発達が遂げられます。

聴覚障害が疑われる時には子どもの聴力検査をしてもらえる耳鼻科を受診し、専門機関に相談に行きましょう。

聴覚障害児の教育は聾（ろう）学校、小・中学校の難聴学級や通級指導教室、通園施設、リハビリテーションセンター、小児の言語聴覚訓練を行っている病院などで行っています。

※次のようなことに心当たりはありませんか。聴覚障害が疑われます。

- ・音や声にほとんど反応しない。
- ・尋ねていることと違うことを答えたり、何度も聞き返したりする。あるいは、オウム返しで答える。
- ・要求を言葉でなく、動作や叫び声で訴えることが多い。
- ・ことばがなかなか出てこない。話している発音が分かりにくい。

